

カウラ事件

「 聖戦 と国民 」より抜粋

2009.4.25

札幌たのしい授業・研究サークル用レポート

仮説実験授業研究会・北海道

丸山秀一

大東亜戦争での日本兵捕虜は、諸外国と比較して異常に少ない数でした。たしかに「捕虜の禁止」を心構えとして説く「戦陣訓」はありましたが、それは法令のような効力を持つものではありませんでした。

日本軍は、徴兵制度により成り立っていました。その制度は「まじめな貧乏人だけが損をする」という不平等なもので、国民は徴兵を忌避しました。

日清日露戦争で、日本は国際条約を守り捕虜を人道的に扱いました。しかし、貧困に苦しむ国民は捕虜を許しませんでした。その世論は、弱い日本軍をごまかそうとする軍部のねらいと重なり、国全体が神懸かり的な精神主義に傾きました。「本音とタテマエ」を分離する日本人は、自らそれに束縛されていったのです。

【問題】

1944年7月のサイパン玉砕で東条内閣は総辞職し、翌月閣議は国民総武装を決定し、「武器」(竹槍)が国民に渡されました。そして同じ月、オーストラリアのカウラ捕虜収容所では、1000名の日本兵捕虜が暴動を起こし、200名以上が死亡しました。

なぜ敗戦濃厚のこの時期に、日本兵捕虜は暴動を起こしたのでしょうか。日本兵捕虜は、収容所で虐待されたので、暴動を起こしたのでしょうか。まず、収容所の生活を予想してみてください。

予想

- ア 自由自適で快適な生活だった
- イ 強制労働もあったが人道的だった
- ウ 虐待されていた



カウラ捕虜収容所

収容所には豊富な食料があり、日本兵が「魚が食べたい」とい
えば、次の日には魚が出てきたほどでした。労働はほとんどなく、
自由時間ばかりのため、捕虜たちは手作りの道具で麻雀、花札、
野球、演劇などをたのしむ生活を送っていました。

1000名の捕虜は40班に分けられて、それぞれの班長や全体の
責任者である団長は、軍隊の階級でなく、民主的に選挙で選ばれ
ていました。というのも、捕虜のほとんどが階級や氏名を「宮本
武蔵」「長谷川一夫」のように偽っていたからです。それは、何よ
りも「自分が生きて捕虜になっている」ということを日本に知ら
れたくはなかったからです。そして、収容所のことは、班長会議
ですべてが決定されていました。

【問題】

収容所の日本兵捕虜は、「ときがきたら決起して、軍人として死のう」と主張する強硬派と、そのようなことはあまり考えない穏健派と分けることができました。では、強硬派の比率は、どれくらいだったのでしょうか。

予想

- ア ほとんど全部
- イ 過半数
- ウ 半分ぐらい
- エ 少数派

陸軍兵と海軍兵は、どちらが強硬派だったのでしょうか。

海軍兵と陸軍兵

カウラでは、海軍兵と陸軍兵が1対4の割合であり、概ね海軍兵が強硬派、陸軍兵が穏健派で、その比率は3対7程度でした。海軍兵は、艦船の沈没などで、元気なうちに捕虜になることが多く、また艦隊勤務では武器を携帯しておらず、泳げる人間がおぼれるのも困難で自殺もできず、自責の念も強かったのです。そこで、強硬派は、「敵軍の資源を消耗させるため」に、食事を多量に支給してもらっては、故意に捨てたり、収容所側の命令にいちいち逆らったりしていました。それに対して、穏健派の中心であった陸軍兵は、ジャングルなどで飢餓状態になって、人事不省で捕虜になることが多く、収容所での生活は「死線をくぐり抜けての生」だったのです。

【問題】

暴動は、オーストラリア側から「収容所が手狭になってきたため、捕虜の半数を三日後に別の収容所に移動させる」という通告がきたことがきっかけでした。

その通告に対して、早速班長会議が開かれましたが、その様子はどんなものだったのでしょうか。

予想

- ア 暴動を起こすことを議論した
- イ 命令に従うことを議論した
- ウ 特に意見は出なかった
- エ そのほか

引っ越し準備

数時間にわたる班長会議では、特に何の意見も出されませんでした。穏健派にとっては、移動させられることは、特に文句を言うほどのことではありませんでしたが、強硬派はどうだったのでしょうか。「ときがきたら決起しよう」と主張してきた強硬派にとって、この「半分を移動させる」という命令は受け入れがたいものでした。人数が半分に減っては、効果的な暴動は起こせないからです。ですから、強硬派にとっては「決起する 때가来た」のですが、そのような主張はありませんでした。強硬派といっても、本気でそんなことを考えていたわけではなかったからです。実際、暴動の準備はなにひとつしていなかったのです。

さりとて、強硬派から「命令を受け入れる」とは言えませんし、穏健派も強硬派に配慮して、意見を出さなかったのです。こうして、ただただ「どうしたものかね」「まあしょうがないね」などの話だけで、点呼の時間が来たために、会議はいったん中断となりました。

会議の間も、捕虜たちはせっせと引っ越しの準備を始めていました。送別会の準備をする者や、移動による野球チームのレギュラーや演劇の配役の変更をどうするかがもっぱらの関心事だったのです。

こうして、点呼の後に再開された会議でも、特に意見が出ることはなく、時間が過ぎていきました。そんなとき、下山と名乗っていた班長が「貴様ら、それでも軍人か。こんなことをしておってもどうにもならん。帝国軍人たる者、敵に攻撃を加え、ひとりでも多くの敵を殺して、自決すべきではないか」と言い出したのです。そして、別のひとりの班長が、それに賛同しました。しか

し、ほかには意見は出ず、結局、民主的に「全員の投票で決める」ということになりました。

【問題】

暴動の目的は「敵弾で死んで、捕虜の汚名を消すこと」でした。それに「賛成か反対か」かが、各班で「」「×」を書く無記名投票で問われました。では「」とした賛成票の割合は、どれくらいだったでしょうか。

予想

- ア 8割以上
- イ 6~7割
- ウ ほぼ5割
- エ 3割以下



カウラ捕虜収容所跡地

多数決

班長会議では「それでも軍人か」と言われると、誰も反対できませんでした。しかし、捕虜のほとんどが「暴動による死」を望んでいないのは明白でしたから、多数決で暴動を否定しようとしたのです。そして、投票の結果、約 8 割が「賛成」でした。

その 8 割の捕虜は、暴動に賛成だったのでしょうか。いいえ、そうではありません。「本心は反対だったが、ここが年貢の納め時だ」「仕方がない」「生きて帰りたいが、日本軍人だからみんな一緒に死ななければならない」という気持ちだったのです。そして、一番大きい理由は、「自分は 非国民 と言われたくないから、を付けるが、多くの良識ある者たちは×をつけるだろう」と無責任にみんなで思っていたことなのです。それは、現在の選挙でも同じ、民主主義の恐ろしさです。

もちろん「こんなところで死ぬのは嫌だ。生死の問題を多数決で決めるのはおかしい」と×をつけた人たちもいました。しかし、「×つけたが、非国民といわれたら、恥ずかしいとその後心底後悔した」という人もいたのです。

投票後の班長会議で、誰もが否決されるだろうと思っていた暴動は、多数決により決行されることが決まりました。民主主義のシステムに逆らえなかったのです。会議では、暴動の目的が次のように決まりました。「わが軍は非常に不利な戦いをしている。それに協力できる道はただひとつ。暴動を起こし、わが軍の戦意を高揚させ、合わせて敵の心胆を寒からせしめ、敵の戦意喪失を図ると共に、収容所の警備を強化させて、前線への兵士兵器を少なくさせる。こうして、一度戦死した我々が再度国にご奉公できることになり、敵兵の銃弾で死ぬことができる」つまりは「死ぬこ

と」のみが目的だったのです。だから、暴動の計画は「二手に分かれて脱走して 500 メートル先の丘に集合する」というだけで、その後の計画は何もありませんでした。

会議の後、捕虜たちは口々に「どうしてこんなことになったのだ」と話しました。しかし、会議では反対意見は出されなかったのです。暴動の生存者は後に「会議では意見を言わず、終わってから文句を言う」という日本人の悪い面が出た」と語っていました。

こうして移動の準備は、突然暴動の準備に変わりました。鉄条網を乗り越えるための毛布や、武器が集められました。武器といっても、野球のバットや食事用のナイフなどだけで、暴動が計画的でなかったことを表していました。

【問題】

収容所には、傷病で身体の不自由な人や、軍に徴用された漁船の乗組員などの軍人ではない人もいました。これらの人も暴動に加わったと思いますか。

予想

- ア 参加した
- イ 参加しなかった
- ウ 自決させられた

「お先に失礼します」

暴動を主張した人たちは、暴動に先立ち、宿舎を焼き払い、暴動に参加できない者には自決を求めました。そこで身体の不自由な者たちは、「お先に失礼します」といって、首を吊っていきました。それを止める者はいませんでした。暴動の目的は「死ぬこと」で、参加した者も死ぬ定めだったからです。また、「もう人を殺すのは嫌だ」と言って自殺した捕虜もいました。

軍人ではない者たちには迷いがありました。しかし、「みんな同じ行動が求められる」のが日本人です。暴動に生き残ったある捕虜は「軍人じゃない人たちに、どうして 兵隊じゃないのだから死ぬ必要はない と言ってあげられなかったのか」と今でも後悔しています。

そして、深夜、「デデクルテキハミナミナコロセ」の突撃ラッパを合図に、1000名の捕虜が脱出を目指して、宿舎に火を放って鉄条網へと向かいました。オーストラリア兵は、最初は威嚇射撃を

しましたが、ひるまずに突入してくる日本兵を機関銃で倒していきました。計画性の全くない暴動は「みんなで押せば門は破れる」としていましたが、門はびくともせず、次々と撃たれて死んでいきました。



現在のカウラ収容所跡地

【問題】

それでも 300 人以上が脱出に成功しました。では、脱出した者たちは、その後どうしたと思いますか。

予想

- ア ゲリラとなった
- イ 民間人を殺戮した
- ウ 自決した
- エ そのほか



カウラ事件を伝える現地の新聞

目的は死ぬこと

目的の丘に集合した者たちのうち何人かは、そこで自殺しました。オーストラリア軍が丘を包囲したとき、捕虜たちは「殺してくれ」と頼みましたが、オーストラリア軍は捕虜たちを逮捕しただけでした。司令官は「脱走した捕虜たちは武器を持っていないから、発砲するな」と指示していたのです。

この脱走は、「残酷で狂気の日本兵が脱走した」として地域の住民をパニックに陥れました。しかし、実際に住民たちに発見された捕虜たちは、住民たちに危害を加えることなく自殺するか、大人しく逮捕されていきました。ある捕虜は、農家の納屋に隠れているところを住民に発見され、食事のもてなしを受けた後、お礼を言ってから、駆けつけてきたオーストラリア兵に逮捕されました。そのとき捕虜が使った食器は、いまでもその家に大切に保管されているそうです。

こうして、脱出した全員が10日もしないうちに全員逮捕されたのでした。結局、暴動による死者は、射殺183名、自殺31名、焼死体12名、そのほか5名の231名とオーストラリア兵4名でした。暴動の結果、捕虜たちが一番驚いたことは、暴動を主張した人たちの多くは、暴動に参加しておらず、多数が生き残っていたことでした。特に、暴動のきっかけとなった下山班長は生き残ったことを捕虜たちに詰問されて、首つり自殺させられました。

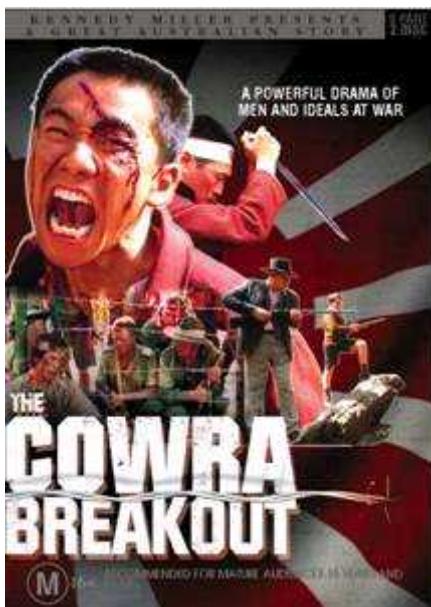
暴動の後、カウラ収容所の別の地区に収容されていて暴動に参加できずに死ねなかった将校捕虜は「我々の暴動への関与は明白であるから、将校全員を銃殺にしろ」とする要求を収容所に出しました。

【問題】

オーストラリアは、この暴動に参加した捕虜たちをどう扱った
と思いますか。

予想

- ア 責任者だけを処罰した
- イ 全員を処罰した
- ウ 特に何もなかった



カウラ事件はオーストラリアでTV 映画化された

天皇の責任

オーストラリアには、「なぜこんな事件が起こるのか」が全く理解できませんでした。捕虜の目的は、ただただ「天皇陛下バンザイ」と行って死ぬことだとしか思えなかったのです。キリスト教徒にとって、自殺は罪でしたし、捕虜になるということは「最前線で戦っていた証拠」で名誉なことだったのです。また、戦場で米兵はルーズベルトの悪口を言われても「よく知っているな、その通り」と応じていたのに対して、日本兵は天皇の悪口を言われると激昂していました。そこでオーストラリアは、「天皇への崇拜が日本兵をこの狂気に走らせた」と考え、天皇の戦争責任を戦後一貫して追及しました。

オーストラリアは、「暴動を計画した」として団長のみを裁判にかけ、敗戦まで禁固刑としました。ほかの捕虜たちは一切罪を問われることなく、それまでと同じ待遇を得て、全員がほかの収容所へと移送されていきました。また、死者は、日本人墓地に埋葬



され、戦後も現地の退役軍人会が管理をつづけました。日本が、その管理を引き継いだのは、戦後 20 年がたってからでした。

カウラ日本人墓地。

右手前の木は、かつての皇太子（現在の天皇）が植樹したもの

【問題】

オーストラリアは、事件の顛末と捕虜名簿を日本に届けました。
では、日本政府はどんな反応をしたと思いますか。

予想

- ア 死者を軍神として宣伝した
- イ 全く無視した
- ウ 事実をねじ曲げて報道した



カウラ暴動で日本兵が用いた「武器」

「日本軍人は決して捕虜にはならない」

日本政府はこの連絡を完全に無視しました。「戦意向上」をひとつの目的としたこの暴動も無駄だったわけです。ただ、インドネシア日本軍占領地英語放送のみがこの事件を次のように伝えていました。

「200 人を越す無実の日本人が深夜虐殺された。不幸にも亡くなった人々が軍人であろうはずがない。オーストラリアに暮らしていた民間人抑留者である。周知の通り、日本軍人は決して敵の捕虜にはならない。捕虜になって不名誉や屈辱を受けるぐらいなら、日本軍人は自決の道を選ぶ」

そして、翌年には「オーストラリア軍の行為は、民間人を虐殺する人道に対する許し難い侵害である。日本人に対してこのような行為を取るなら、日本も報復措置を執る」とオーストラリア政府に抗議しました。



鉄条網を乗り越えるためにかけられた毛布と死んだ捕虜

カウラ事件でも「捕虜になるよりも死」の信念が民主的制度で強制されました。兵士にとっては、捕虜になることは、家族に禍をもたらすものでしかなく、玉砕して靖国にまつられることだけが遺族に残せるかけがえのない遺産でした。しかし、これは、日本国民の共通理解として、兵士だけでなく、日赤従軍看護婦にも、沖縄戦での民間人にも押しつけられ、死を強要したのです。

『菊と刀』のベネディクトは「玉砕や神風などの言葉は ぼんやりとしたロマンチズムで死を覆い隠そうとする日本人の本性」と書いています。

【問題】

1964年、カウラ日本人墓地は整備され、オーストラリア各地から集められた275名分の日本兵遺骨も一緒に埋葬され、墓地は日本に永久貸与となりました。カウラ暴動での生存者たちはカウラ会を結成し、翌年には、第一回カウラ国際祭が現地で開かれました。

では、カウラ暴動生存者800名のうち、カウラで捕虜だったことを認めて、カウラ会に入会したのは何人ぐらいいたと思いますか。

予想

- ア ほぼ全員
- イ 7~8割ぐらい
- ウ 半数ぐらい
- エ 2~3割ぐらい
- オ もっと少ない

世界平和の鐘

カウラ暴動で生き残った 800 名のうち、帰国して捕虜だったことを認めたのは、半数以下の 300 余人であり、そのうちカウラ会に入ったのは、80 人だけでした。多くの捕虜は、ずっと捕虜だったことを隠しながら生きていたのです。だから、カウラの墓地にある墓碑銘も、そのほとんどが偽名のままです。彼らの偽名による死は、なんのためだったのでしょうか。

それでも、カウラ会の人たちは「誰にも事件のことは言わなかったが、今の若者には残したい」と活動を続け、1979 年には、カウラ日本庭園が開園されました。さらに、1990 年には「世界平和の鐘」がオーストラリアにも設置されることになり、その場所はカウラと決定しました。

「世界平和の鐘」とは、1954 年に戦争の悲惨さ、核廃絶、平和の尊さを訴えるため日本で作られた組織で、当時の国連加盟国 65 か国の硬貨を融かして鑄造した「世界平和の鐘」が国連本部に寄贈されました。その後も、世界各国の硬貨で作った「世界平和の鐘」が世界各国に設置され続けています。



国連本部前の世界平和の鐘

エピローグ

戦後、東京裁判の裁判長となったオーストラリアのウェブ最高裁判所長官は「日本に無条件降伏をもたらせた天皇の権力を考えれば、もし天皇が軍や国民に残虐行為やその他の戦争法規違反行為を思いとどまらせるように命令したなら、日本人はすぐに従ったであろう」と述べました。

また、カウラ事件を取り上げた本や番組は「カウラの悲劇は、言葉の呪縛が何を起こし、何を失わせるのか、今に語りかけています」と「戦陣訓の呪縛」を問題にしています。

でも、本当にそうだったのでしょうか。

カウラ事件での生き残りの一人は、カウラ事件のいきさつを「今の民主主義と一緒に。自分が を付けても、みんなは暴動など起こさないだろう」と甘い考えだった。ハッキリ言って、民主主義はどっちへ動くかが怖い」と話しています。

カウラ収容所での快適な生活の中で、「暴動による死」が民主的に決められたことは、けっして過去の問題ではないことは、たしかかなことです。



おわり

カウラ市役所前の世界平和の鐘

「あとがき」より抜粋

NHK の番組を見て「民主的に集団自殺」が決行されたことに驚きました。番組やほとんどの本では「戦陣訓の呪縛」を問題にしていますが、それはけっして押しつけられたものではありませんでした。捕虜が死を選んだのも、「捕虜が戦陣訓に縛られていたため」というよりも、「国民全体が戦陣訓に縛られていたため」といえます。国民が何かにとらわれているときの「民主主義」は危険なのです。それを実証したのがヒトラーです。

かつての徴兵制度は「国を守るのが国民の義務」としていながら、現実には「外征軍=侵略軍」でした。それは、天皇制の考え方からすると、ひとつの帰結だったのです。

現在こそ「歴史から学ぶ」ということが大切です。「民主主義の世の中だから、過去のようなことにはならない」というのは本当でしょうか。少数意見を尊重しない民主主義は、とても危険なのです。

典拠文献

丸山秀一「『聖戦』と国民」レポート、2006

中野不二男『カウラの突撃ラッパ』文春文庫、文藝春秋、1991、
単行本は、1984

ほか多数

文献詳細は上記のレポート参照の事。

